九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ゲオルク・ビュヒナー(その一)

西田, 越郎

https://doi.org/10.15017/2332909

出版情報：文學研究. 48, pp.29-38, 1954-03-15. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ゲオルク・ビュヒナー（その一）

人間はそれぞれみんなどん底なのだ、
下を見ると目まいがする。
『ヴォイツェック』より

西田越郎

序論

ゲオルク・ビュヒナーとクリスティアーン・ディートリヒ・グラッベは、十九世紀初期の産んだ数少い戯曲作家のうちでもつとも傑出した人たちである。ビュヒナーは一八三七年二月十九日、二十四才の若さをもつてチフスにたおれて死んだ。そして二十二才のときに書かれた『ダントンの死』の上演は、実にその死後百年の記念祭を待たねばならなかつたし、またグンドルフの言を借りるならば、「もつとも真正にして、もつともビュヒナー的な作品」[1]と称すべき『ヴォイツェック』が遺稿から印刷されたのは一八七九年であつた。即ち自然主義の時代におよんでようやく彼は名声をかち得るに至つたのだ。

「一八三〇年代において、真にその時代の高さにあつた作家はただ一人しかいない。その生涯は短く、慧星のように

現われそして消えていつた力強い作家、それはゲオルク・ビュヒナーであつた。彼の『ダントンの死』はこの時代のもつとも重要な戯曲であるのみでなく、ドイツ演劇がゲーテ・シラー以後なした唯一の重要な前進である。近代の歴史劇はゲーテ・シラーにおいて生まれた。しかしビュヒナーのリアリズムは彼らのリアリズムを超えている。美の断念――つまり「芸術時代（クンストペリオーデ）」からの脱出――一層徹底したシェークスピア風はただ外面にすぎない。ビュヒナーは、ダントンと革命との悲劇的対立のうちに、革命の一切の偉大さ、弱点、限界を純粋に劇的に形象化し、性格やシチュエーションに移し入れることに成功した。ここには、最大の民主主義革命の社会問題から世界観の問題にいたるまで、すべてのものが劇的行為に鋳込まれている。ビュヒナーはヘッセンにおける彼の非合法的宣伝活動（プロパガンダ）の短い時期に、かかる諸問題をその理論的および実践的な全範囲にわたつて体験したのだが、彼はこの醗酵期に、ドイツ知識階級の武装を準備するための最大の芸術作品を創造したのである。この戯曲、ならびにビュヒナーの同じく重要な他の作品は、たちまち名声をかちえたものの、その真の内容によつて評価されたことが極めてまれであるということは、ドイツのイデオロギー的発展の特徴をよく示すものである。民主主義革命のこの深刻な自己批判は、一度ならず直接に反革命的に解釈された。ハイネとビュヒナーの批判的深さにたいするこの無理解は、「若きドイツ」の平板さ・無内容と同様、民主主義革命の準備期におけるドイツの文学的・政治的未熟の徴候である。(2)」

これはビュヒナーの文学についてルカーチが述べた一節を抜書したものである。ルカーチのいうように、ビュヒナーは「その真の内容によつて評価されたことが極めてまれで」あつたことは確かに事実である。保守派の文学史家はビュヒナーを黙殺するか、あるいはたとえ彼に触れたにしてもその作品を不当に貶しめたものである。またナチズム支配下の「第

三帝国」におけるビュヒナーの運命はどうであつたか。『ダントンの死』は盛んに上演されたといわれているが、やはりヘルダーリーンなどと共に、歪曲して解釈されたことは否定出来ないのである。（ちなみにルカーチは、そのビュヒナー論《Der faschistische verfälschte und der wirkliche Georg Büchner[3]》においてこの問題をとりあげて、グンドルフ、K・フィエトル[4]、A・プファイファー[5]のビュヒナー論を槍玉にあげている。フィエトルはもつともすぐれたビュヒナー研究家であるが、その『ダントン論』[4]についてのルカーチの所説には俄かに賛同しがたいもののあることを附記しておこう。）

しかしその反面、ビュヒナーにプロレタリア芸術の先駆者を認めて、彼を不当にもちあげる者のあることも見逃し得ぬ事実である。この早熟の天才が見出した戯曲様式は、みずから自然科学者でもあつた彼の、事物を鋭く捉える医学的観察のリアリズムに支えられているのであるが、それは確かに時代に一世紀もさきがけたものではあつた。『ダントンの死』また『ヴォイツェック』という二つのすぐれた戯曲を遺した彼は、大学修業中に革命的秘密結社を結び、友人ワイディヒと共にパンフレット『ヘッセンの急使』（Der Hessischer Landbote）を発行して、農民に配布した。この革命的運動は、ビュヒナーの目にうつつたヘッセン・ダルムシュタットの苦難に苛まれた民衆の生活に、骨の随まで腐敗したドイツの悲しむべき実情をみてとり、搾取者への反抗を煽動せんがためのものであつた。灰色にとざされた所謂 Vormärz の空気をうち破ろうとするものであつた。ビュヒナーは革命的情熱をうちに蔵し、行動に訴えたのではあるが、『ダントンの死』・『ヴォイツェック』の詩人としてのビュヒナーを、はたして独自の政治思想家と見ることが出来るであろうか。筆者の考察によれば、ビュヒナーは、政治的主義綱領を理論的に創造する才能などは持ちあわせぬ単なる行動家にすぎなか

つたのである。ビュヒナーは、ヘッセンにおける社会革命運動の失敗後、官憲の追求を避け、ダルムシュタットで獄死するよりは、むしろ逃亡を選んで、ドイツの地を去り、流謫の身とはなつた。そしてダルムシュタットの父の家に潜んでいた間に書上げられた『ダントンの死』がグツコウのはからいで出版されたのである。落ちのびたシュトラースブルクから更にスイスのバーゼルに移り、そこで大学講師の職を得て、間もなく歿するまではひたすら自然科学の研究と創作とに従つていたのである。この経違をみるとき、われわれの注意をひくのは、ビュヒナーにおける「行動と文学」の問題であろう。

ルカーチは「ダントンと革命との悲劇的対立のうちに、革命の一切の偉大さ、弱点、限界」が「純粋に劇的に形象化され」、「最大の民主主義革命の社会問題から世界観の問題にいたるまで、すべてのものが劇的行為に鋳込まれている」というが、『ダントンの死』は決して政治的な傾向劇ではなかろうし、また『ヴォイツェック』はヘッベルの『マリア・マクダレーナ』などの社会悲劇の先駆とよく云われるけれども、これも単なる社会的傾向劇ではなかろう。

註

1) Friedrich Gundorf : Romantiker. Berlin-Wilmersdorf 1930. S. 391.
2) Georg Lukacs: Fortschritt und Reaktion in der deutschen Literatur. Berlin 1950. S. 82.
3) Georg Lukacs : Deutsche Realisten des 19. Jahrhunderts. Berlin 1952. S. 66.
4) Karl Viëtor : Die Tragödie des heldischen Pessimismus. DVJS XII 2, 1934.
5) Arthur Pfeiffer : Georg Büchner. Vom Wesen der Geschichte des Dämonischen u. Dramatischen. Frankfurt am Main 1934,

筆者がかつて親しんで、心にあたためていたビュヒナーの作品を、最近ある必要から読み返す機会を持ったのであるが、以下に拙いながらビュヒナーの人と作品とについて、筆者なりの考察を加えてみたい。ビュヒナーを貫く糸は Politik、—Dichtung—Wissenschaft にあらわされると思うが、自然科学に真に心を向けたのはごく晩年になつてからであつて彼の創作活動に大きな比重を占めるのは政治と文学であるから、筆者の考察も多くそれに費やされるであろう。

一　その生涯

カール・ゲオルク・ビュヒナーは一八一三年十月十七日、ヘッセン大侯国ダルムシュタットに近いゴッデルアウに生まれた。奇しくもライプチヒの戦の日である。一八一三年といえば、(ビュヒナーについてよく云われるように) ヘッベル、オットー・ルードヴィヒ、リーヒアルト・ワーグナーが生まれている。これにビュヒナーを加えた四人が生まれ合わせたこの年は、ドイツの演劇に豊かな実りをもたらしたのだ。三歳の時、両親は首都ダルムシュタットに移つた。父はエルンスト・カール・ビュヒナーといつて小村ゴッデルアウの医師であつた。かなりの旧家で代々外科医であつた。父の青年時代はあたかもフランス革命にあたり、彼自身ナポレオン麾下のオランダ軍の軍医として従軍した経験もある。これは『ダントンの死』の成立を考え合わせてみると重要なことであろう。ビュヒナーは幼時しばしば父からフランス革命の物語を聞かされ、また一七八九年から一八三〇年に及ぶ時期の主要な事件をとり扱い、一八二六——三〇年に発行された雑誌 Unsere Zeit を父はよく朗読したということである。父はかなり厳格な性質で、子供たちは厳しい教育をうけた。また医師・自然科学者としての体験から、無神論的傾向を持つていたと云われている。ビュヒナーと宗教の問題[1]、殊にスピノザ

への関心とそこに示された無神論的告白、あるいは人間の苦悩と神によつて創造された世界とのからみ合いという問題とビュヒナーの格斗[2]を考えるならば、更にまた後年『力と物質』(Kraft und Stoff. 1855) によつて有名になつた弟ルードヴィヒの唯物論を考えるならば、これまた興味深いことであろう。彼の明晰な体系的思考の能力も父に負うものであろう。母ルイーゼ・カロリーネ・ロイスはヘッセンの高官の家に生まれた。彼女は父とは異つて明朗な気質の情熱的・感覚的な女性であつた。父がナポレオンの崇拝者であつたのに対して、母はドイツ自由戦争の詩人テーオドール・ケルナーをひいきにするという愛国主義者であり、素朴敬虔なキリスト教信者であつた。父はおよそ、芸術的・詩人的素質と縁のない人物であつたが、母の持つた世界は遙かに広く、殊に文学を愛した。ビュヒナーの詩人的素質は明らかに母から受けつがれたものである。ビュヒナーと父との関係は必ずしもしつくりしたものではなかつたらしい。彼が後に、官憲の目を逃れて、父家に潜伏していた時、父の目をかすめて、逃亡させてくれたのもこの母であつたと云われる。

註　(1) それはビュヒナの友人の伝える彼の次のような言葉にもうかがえる。Das Christentum gefällt mir nicht-es ist mir zu sanft, es macht lammfromm. (Georg Büchners Werke und Briefe, herausgegeben von Fritz Bergemann, Leipzig. S. 415)

(2) スピノザに対するビュヒナーの態度には無神論的傾向が認められるが、しかしそれはまた次のような記述と矛盾することに注目しなければならない。ビュヒナーの親友であり、その臨終につきそつたウィルヘルム・シュルツは、一八三七年二月二十三日、Neue Züricher Zeitung に追悼文を寄せ、そのなかでこう述べている。「彼はある日記の遺稿において、自分の魂の状態を秋の夕べに比し、次のような言葉でその記述を結んでいる。Ich fühle keinen Ekel, keinen Überdruß ; aber

ich bin müde, sehr müde. *Der Herr schenke mir Ruhe !*」(Werken. Briefe, S. 448.) またビュヒナーの臨終について述べたカロリーネ・シュルツの日記には次の如き記述がある。Wir haben der Schmerzen nicht zu viel, wir haben ihrer zu wenig, denn *durch den Schmerz gehen wir zu Gott ein !* — Wir sind Tod, Staub, Asche, wie dürften wir klagen?(Werke u. Briefe, S. 442) 死に臨んでの前者の lebensmüde な響きと、後者に見られる「苦悩の至福」とは、ビュヒナーのそれ以前における Leiden に対する態度と明らかに矛盾するものである。これについては稿を改めて述べるつもりである。

一八二五年ビュヒナーはダルムシュタットのギュムナージウムに入学した。こゝに約八年間在学していたが、その間に彼の精神的解放は政治的な事件によつて行われたのである。抑圧された者への同情と厳しい正義感は、当時のヘッセンの政治状勢によつて一層刺戟されることになつた。そこへ伝えられたパリ七月革命の報知はドイツ人の心を揺さぶらずにはいなかつた。それはまた同時に、ドイツ諸侯の反撥をひき起したが、ビュヒナーも七月革命の報にはいたくうたれたのであつた。今や自由はビュヒナーの崇敬する理想となり、この視点から彼の世界像は変化せしめられることになつた。かかる彼の感情を最も鋭く最も純粋にあらわしたものは、カートについての彼の演説で、ギュムナージウムを去る半年前に行われたものである。そこには、自由を奪われたカートをしてその束縛から救い得たこの自殺なる行為が、祖国と自由に対する根本感情が人間の胸に燃えている限りは、人間的偉大さの忘るべからざる一例として讃えられているのである。しかし彼は政治的熱情に浮かれていたのではなくて、自然科学への興味も失つてはいなかつた。それは文学に対する関心にも反映して、以前母からの影響で、惹かれていたシラー、マッテイソンなどの所謂 Idealdichter にとつて変つて、レアリ

ステイシュな文学すなはち、シェークスピア、ゲーテ、ホメロス、あるいは民謡（例えば Herder の Stimmen der Völker あるいは Des Knaben Wunderhorn）等を好むようになつた。ジャン・パウル、カルデロン、ヴィクトル・ユーゴーなどもその中に加えられる。そして後年、小説『レンツ』（断片）の主人公になつたシュトゥルム・ウント・ドラングの詩人レンツの著作に親しんだのもこの頃である。しかしまだ詩人としての試みには達していない。やがて医学修業のためシュトラースブルクに移るに及んで、これは次第に明瞭な姿をとるに至るのである。

一八三一年十一月シュトラースブルク大学入学。彼は動物学、比較解剖学を熱心に修めた。美しいエルザスの風景にさそわれて、ビュヒナーはフォーゲゼンの山野を跋渉した。ここでの生活は彼にとつて極めて重要なものとなつた。というのはビュヒナーが世話になつた牧師の娘ミンナ・イェーグレを愛し、やがて彼女はビュヒナーの許嫁となつたからである。ここで忘れてならないことは、当時シュトラースブルクが、革命的な雰囲気に溢れた土地であつたことである。ビュヒナーの目にも当然それは写つた訳であり、その頃彼が両親にあてた書簡にそのことはうかがえるのである。一八三三年フランクフルトに発生した騒擾事件にふれ、ビュヒナーの行動に不安を感じている保守的な父親に対して、自分はあの革命運動からは遠ざかつているから心配しないようにと書き送つている。(1) さてこゝに滞在すること二年、一八三三年秋彼は学業を終えるために故郷のギーセン大学に移つた。この頃の書簡〔一八三四年二月両親宛〕に次のようなものがある。

Der Haß ist so gut erlaubt wie die Liebe, und ich hege ihn im vollsten maße gegen die, welche verachten. Es ist deren eine große Zahl, die im Besitze einer lächerlichen Aeußerlichkeit, die man

Bildung, oder eines toten Krams, dem man Gelehrsamkeit heißt, die große Masse ihrer Brüder ihrem verachtenden Egoismus opfern. Der Aristokratismus ist die schändlichste Verachtung des heiligen Geistes im Menschen, gegen ihn kehre ich seine eigenen Waffen, Hochmut gegen Hochmut, Spott gegen Spott…… Ich hoffe noch immer, daß ich leidenden, gedrückten Gestalten mehr mitleidige Blicke zugeworfen, als kalten, vornehmen Herzen bittere Worte gesagt habe.(2)

貧しい哀れなヘッセンの農民への叫び――「諸君はまったくの無である。諸君は何物も持っていない。諸君は無権利なのだ。諸君は飽くことなき抑圧者どもの要求するものをさし出し、彼らが諸君に課するものを負担しなければならないだ」(Ihr seid nichts, ihr habt nichts! Ihr seid rechtlos. Ihr müßt geben, was eure unersättlichen Presser fordern, und tragen, was sie euch aufbürden.)(3)――この『ヘッセンの急使』のなかの叫びは恐らく、前に掲げた書簡に発すると云えるだろう。また『ヴォイツェック』においてもしかり、哀れな兵隊理髪師ヴォイツェックを「軽蔑するエゴイズム」の犠牲に供する人々への、ヴォイツェックの戦いはこゝに発するのではなかろうか。

ギーセンにおけるビュヒナーのフランス革命の歴史の研究からもたらされた絶望感が、書簡〔一八三四年一月？　許嫁ンナ・イェーグレ宛〕中の次のような言葉にあらわされている。

「私は（フランス）革命の歴史を研究しました。私は歴史のおそろしい宿命論にうちひしがれたような気がします。私は人間の性質のうちには驚くほどの同一性があり、人間の諸々の関係のなかには、すべての人々に与えられていて、何

人にも与えられていないある一つの避けがたい暴力があることがわかりました。個人は波の上の泡沫にすぎず、偉大さとは単なる偶然であり、天才の支配は人形芝居であり、鉄の法則に対する笑うべき格斗にすぎません、この法則を認識することこそ最高のことであつて、これを支配することなど不可能です。……」[3]

こうして歴史上の偉大な人物への信頼は彼から奪われたのである。しかもその彼、ビュヒナーがシュトラースブルク『人権協会』にならつて革命的結社を結び、パンフレット『ヘッセンの急使』によつて革命家として行動しているのである。しからばビュヒナーをして革命家として行動せしめたものは、一体何であつたのだろうか。（未完）

註 1) Werke und Briefe, S. 356 ff.
2) ibid. S. 364.
3) ibid. S. 335.
4) ibid. S. 362.